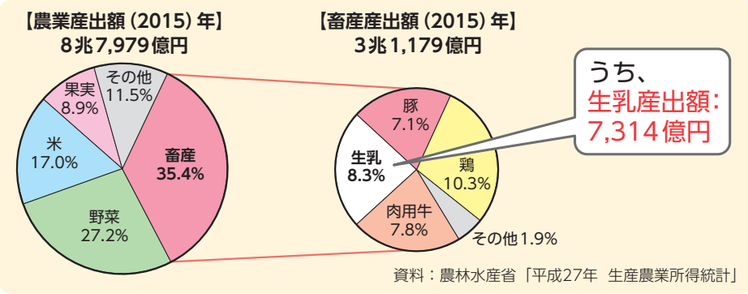
日本の酪農と指定生乳生産者団体の果たす役割

（一社）中央酪農会議
業務部次長 **齋藤 淳**

「2015年の日本の産業市場規模から言うと、国内生産額約928兆円のうち、農業全体では9兆円弱、約1%です。酪農はその一部ですが、日本の農業産出額のうち畜産は第1位で、生乳はその約8%を占めています。牛乳乳製品の国内需要量は1,189万t（生乳換算）で、お米の需要（860万t）より多い、基礎的な食料なのです。

酪農のような基幹的な産業の使命として、「良い物を・手頃な価格で・安定的に供給すること」が不可欠です。そこに、需給に基づく調整を行ないつつ、酪農家の代わりに生乳販売等を行なう指定生乳生産者団体（指定団体）の機能・役割があるのです。酪農家は牛の飼養管理に注力して搾乳し、指定団体は酪農家に代わって生乳の品質を検査するなどして、乳業メーカーに販売し、酪農家に毎月、その生乳代金を支払います。このシステムがうまく機能しているため、日本の95%以上の生乳は指定団体を通じて販売されているのです」



指定団体の果たす役割

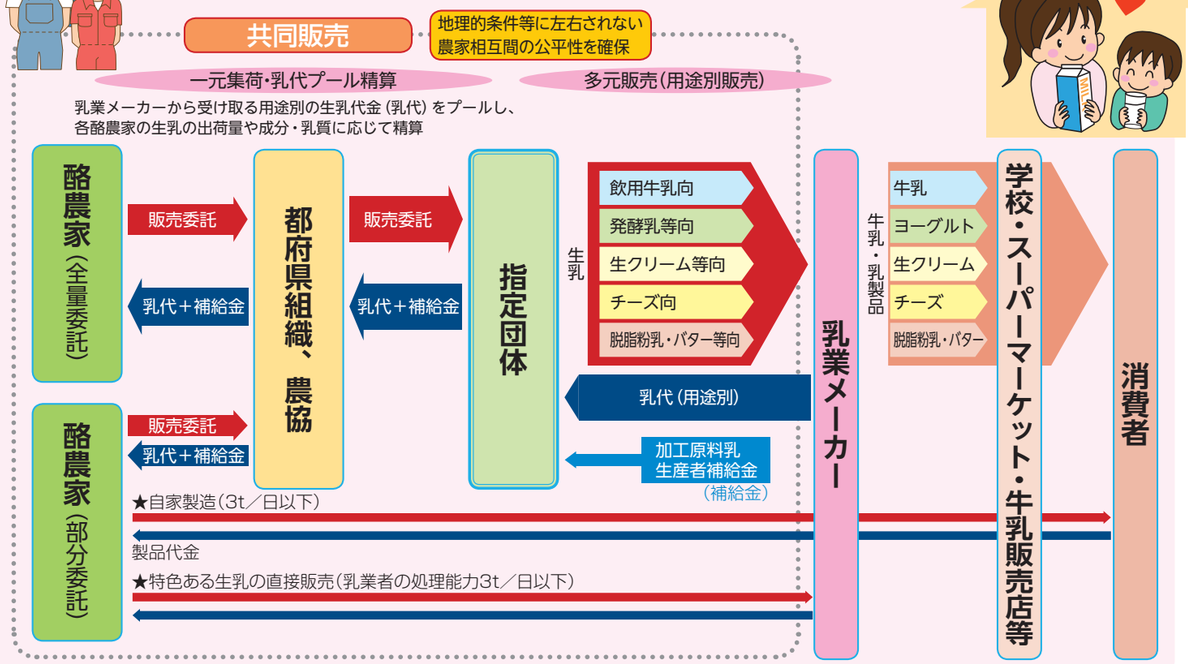
- 酪農家の経営安定
- 製品の価格安定
- 牛乳・乳製品の安定供給
- 製品の安全性の確保
- 酪農理解醸成活動

生乳の主な特性

- ■生乳は、生き物である乳牛から、毎日生産されます。
- ■生乳は栄養が豊富である反面、傷みやすく、貯蔵性がない液体ですので、搾乳してから短時間のうちに、牛乳・乳製品に処理・加工することが求められます。
- ■生乳生産（供給）量は、天候、気温、牛の体調等に左右され、毎日、同じ量にはなりません。
- ■生乳需要量も、天候、気温、季節、消費者のニーズ等により、変動します。
  ⇒他の農畜産物に比べて、個々の酪農家は生乳取引で不利な立場（＝買い手市場）に置かれやすいのです。

酪農家は、牛が暮らす環境を守り、愛情をもって牛を育て、健康を守り、生乳を搾っています。

現行の指定生乳生産者団体（指定団体）制度の仕組み
“安全・安心な牛乳・乳製品が届くまで”



JDC ニュースレター
イベント取材レポート
地域交流牧場全国連絡会主催 平成29年度クラブ・ユース事業
2017年7月発行 Vol.13
2017年 夏

一般社団法人 **中央酪農会議** http://www.dairy.co.jp/
〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町2-6-1 堀内ビルディング4階 TEL：03-6688-9841 FAX：03-6681-5295

次代を担う若手の交流イベント

―「らくのうサミット in 北海道」開催 ―

去る6月7・8日、北海道十勝管内芽室・鹿追両町で、若手酪農家、学生らの交流イベント「らくのうサミット in 北海道」が開催されました。これは、地域交流牧場全国連絡会〈交牧連注)、事務局：（一社）中央酪農会議〉が、次世代を担う酪農家の育成を主な目的に、平成26年に立ち上げた「クラブ・ユース事業」の一環。これまでに「若手の集い」は全国で5回開催され、第6回目の今回は初の北海道開催となりました。若手酪農家や酪農関係者、酪農に関心を持つ大学生ら約90人が参加し、ディスカッションや牧場視察などを通して交流を深めるとともに、未来の酪農像を探りました。

注）“交牧連”については、次ページを参照ください。

これからの日本の酪農をリードする存在たれ

交牧連 会長
渡辺 隆幸さん
（北海道弟子屈町 ㈲渡辺体験牧場）

会場となった新嵐山荘（河西郡芽室町）には、北海道内外から多くの参加者が集合。交牧連会長 渡辺隆幸さんが、「ようこそ北海道へ!」と歓迎の挨拶を行いました。

渡辺さんは、「この“クラブ・ユース事業”は若手の酪農家の皆さん一人一人が主役です。交牧連の会員牧場は現在、全国で300戸以上あり、『つなぐ・続ける・育てる』の3つのスローガンを掲げて活動しています。これは『酪農家同士を“つなぎ”、相互研鑽と交流を行う。消費者など酪農家以外の方々との交流を“続ける”。酪農の後継者や理解者を“育てる”』ということです。将来は、ここにいる皆さんが日本の酪農界をリードする存在となってください。そのためにも今日は若手の酪農家同士、また酪農業界を目指している学生など、多くの人たちと大いに語り合ってください」と激励しました。

同世代の酪農家と、悩みや夢を語り合える場

交牧連 クラブ・ユース代表
石田 陽一さん
（神奈川県伊勢原市 ㈲石田牧場）

続いて、若手酪農家の代表 石田陽一さんから挨拶がありました。

「交牧連クラブ・ユース事業“若手の集い”の良さは、全国各地から若い世代の酪農家、酪農関係者、学生が一堂に会することで、このような場は他にありません。同世代が日ごろ抱えている悩みや夢を語り合い、学生の皆さんは進路に役に立つ情報を持ち帰ってもらいたいと思います」

初日から熱くディスカッション

1日目

牛の飼養管理をはじめ、飼料や搾乳ロボット、6次産業化、酪農教育ファーム活動など、多岐にわたるテーマについてディスカッションが展開されました。

参加者全員での記念撮影。次代を担う酪農家や学生などが一堂に集いました。

INTERVIEW

千葉県袖ヶ浦市　切替牧場
切替（きりかえ）　宣充（よしみつ）さん

都会で酪農をする人が少なくなるなか、酪農家が地域社会で必要とされるためにはどうしたらいいか、それを仲間と話し合いたいと思い参加しました。耕作放棄地を減らして雇用を創出し、地域を保全する役割を担うことができれば、地域になくてはならない存在になれるのではないかと思い、経験を持つ人から話を聞き、情報交換していきたいと思います。

滋賀県甲賀市　山田牧場
長崎（ながさき）　清子（きよこ）さん

「若手の集い」は今回で４回目の参加です。この場では、多様な酪農経営があることを再認識できます。再会したメンバーと深い話もできるし、学生さんから率直な意見も聞けるのがいいですね。職場（牧場）で新人の教育担当をしているのですが、いろいろな意見を聞いて今後の参考にしたいと思います。

香川県三木町　広野牧場
広野　豊さん

これまで毎回参加していますが、前向きな人ばかりに出会えて全国に仲間ができ、お互いの牧場に見学に行ったり来てもらったりしています。農業は北海道から沖縄まで、酪農もあれば稲作もあり、規模や立地条件などもさまざまです。そこで土地の強みを生かして経営している人が利益を上げていて、その事例を知ることがとても勉強になります。

北海道士幌町　山岸牧場
北出（きたで）　愛さん

酪農はいろいろな役割の人がいて成立しています。酪農家、乳業メーカー、酪農ヘルパー、農協など。そんな酪農に携わるさまざまな人たちを通じて情報を知ることができるこの場は、非常に有意義だと思います。テレビなどの情報と違い、一方的な見方ではなく、深く掘り下げて聞くこともできる貴重な場です。

島根県隠岐の島町
遠藤　聖（せい）さん

実家は隠岐の島で、和牛の繁殖と水稲に加えて、農家レストランも経営しています。島でいつか酪農をしたいと思い、酪農学園大学で乳製品加工について勉強し、那須の牧場で働いていましたが、これから、実家に帰って酪農を始めたいと思っています。酪農教育ファーム活動もやりたいと思っているので、実際にやっている方から話を聞きたいし、相談したいです。

帯広畜産大学大学院
喜多村　美花さん

“乳牛の快適性を考えて飼う”という動物福祉の研究をしています。大学入学時は、乳牛は大好きでも、仕事がきついと思い、酪農家志望ではありませんでした。しかし、酪農を仕事とだけ考えるのでなく、暮らしの一部と感じ、家族と牛との暮らしを作っている酪農家の方々と出会い、いま、わたしは牛や酪農の魅力を伝えられる牛飼いを目指しています。

会場にはスキー場のゲレンデが隣接し、夏場は町営牧場の乳牛が放牧されています。

北海道の酪農家らが持ち寄った自慢の一品も披露され、舌鼓を打ちながら乳製品に関する情報交換も。

“交牧連”結成当時の思いと、後継者、学生に期待すること

交牧連　二代目会長
廣瀬　文彦さん
（北海道帯広市
リバティヒル廣瀬牧場）

当日、交牧連二代目会長 廣瀬文彦さんがメッセージを寄せてくださいました。

「30年ほど前、牛肉とオレンジの輸入が自由化されました。加えて、消費者が少しでも安い物を求めるため、農作物が買い叩かれた時代には、食品が陳列棚に並ぶまでの時間、コスト、労力などが全く知られていませんでした。『コーヒー牛乳って、牛にコーヒーを飲ませると出るの?』といった小学生の言葉に、わたしは唖然とし、生産者自らが伝えなくてはと、平成３年、牧場に見学室付きのミルキングパーラー（搾乳施設）を建設、平成８年には年間2,000人が見学に来るようになりました。

一方、中央酪農会議は、酪農の『生産的価値』の他に、何か『非生産的価値』、つまり牧場がそこに存在するだけで意義があるという意味付けを模索し始めました。牧場をオープンにして見学などを受け入れ、酪農の実態を酪農家自らが伝える活動を行うべく、フランスでの教育ファーム組織を先例とし、酪農教育ファーム推進委員会を設立。この趣旨に賛同して平成11年、酪農家自らが運営する組織として「地域交流牧場全国連絡会」（交牧連）が設立されました。

交牧連は、中央酪農会議や指定生乳生産者団体等のさまざまな支援のもと、会員牧場からの会費と、全国の酪農家からいただいている理解醸成のための拠出金で活動しています。酪農教育ファーム活動をはじめ、農家所得向上のための６次産業化推進にも先鞭をつけて来ました。

我々が楽しく農業を行い、その姿を伝えることで、後継者はもとより第三者にも農業が魅力あるものに映ることでしょう。それが離農を減らし新規就農を増やして食料の自給率下落に歯止めをかけ、ひいては日本人の食料主権も守ることになるのです。酪農教育ファーム活動は、21世紀を担うあなた方の責務と考えます」

“交牧連”とは

「酪農生産者同士が交流・意見交換する場をつくり、都市生活者や地域住民との交流活動や教育活動を進めていくことにより、日本酪農に対する理解や支援を獲得する」ことを目的に、平成11年に設立され、平成29年4月時点で会員数313会員（会員は日本全国の牧場）。「食やしごと、いのちの学び」をテーマに教育活動を行う「酪農教育ファーム」と連携し、会員牧場において子どもたちに学習の場を提供するなど、酪農・牧場を通して地域との共生を図っている。酪農家が自主的に運営している組織。

カントリーファーマーズ藤田牧場を訪ねて　2日目

❶〜❺２日目の視察先、カントリーファーマーズ藤田牧場では、牧場を回りながらスタッフの説明を受け、その後、ディスカッションを行い、それぞれ発表。
❻カントリーファーマーズ藤田牧場 藤田均（ひとし）代表。

2日目の視察はカントリーファーマーズ藤田牧場（鹿追町）へ。同牧場の藤田均代表は「日本の生乳生産は減少しています。若い酪農家の皆さんには、生乳をたくさん搾って消費者に安全安心な牛乳を供給してもらいたい。今後は、上手に機械化も導入して省力化を図り、酪農経営をより良くしていくことが求められます。そのためには、それぞれの地域で仲間と力を合わせて、新しく強い酪農を実現することが必要です」と期待を述べました。

その後、牧場スタッフの説明を受けながら、同牧場が提供する酪農体験プログラムを見学。実際に施設を見ながら、多くの質問が出ていました。

そして見学後は、ディスカッションを行い、それぞれ発表。「6次産業化には、他にはない価値を付けることや、マーケティングも含めた販売ルートの確保が重要」「酪農はにおいなど周囲に迷惑もかける。地域の理解を得るためにも教育ファームの取り組みを広める必要がある」「新規就農を増やすためには、何よりも情報が大事」など、２日間の話し合いと見学を経て、グループごとに意見をまとめて発表しました。

北海道の酪農概況　〜広大な大地を生かした大規模酪農〜

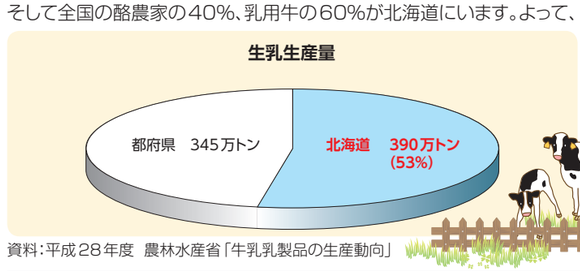
ホクレン農業協同組合連合会
酪農畜産事業本部 酪農部
高橋　伸彰さん

北海道の酪農概況については、ホクレンの高橋伸彰さんから説明がありました。

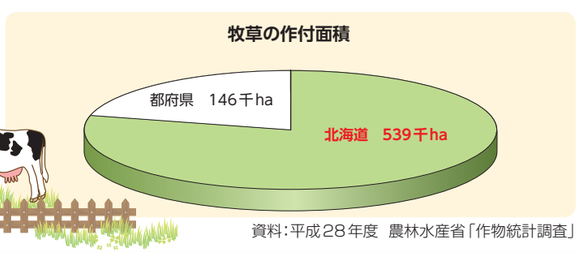
「日本全体の農業産出額８兆８千億円のうち、北海道は約12%、１兆２千億円です。なかでも酪農の占める割合は大きく、乳用牛が第１位、36%で、酪農家が北海道の農業を支えています。

また、全国の生乳生産量735万トンの約53%を北海道で生産しています。都府県で生産される生乳は７割が飲用牛乳向けになりますが、北海道の生乳のうち、飲用牛乳向けは20%で、80%が乳製品になります。そして全国の酪農家の40%、乳用牛の60%が北海道にいます。よって、一戸当たりの飼養頭数が、都府県の約50頭に対して北海道は約120頭と、経営規模が大きいのも特徴です。

牧草の作付面積も北海道は圧倒的に多く、１戸当たり83haです。牛１頭0.4haあれば養えるといわれており、一戸当たりの飼養頭数と比較しても十分自給できる数字です。現在の放牧状況は頭数21万7,000頭、放牧実施割合62.9%であり、広大な大地を生かした酪農を行っています」



資料：平成28年度　農林水産省「牛乳乳製品の生産動向」



資料：平成28年度　農林水産省「作物統計調査」